

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第61号

平成30年1月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

「正四位下に叙し帯刀となる」

「正平二年正行兵を紀伊に發し、河内に還て」

＝ 日本史人名辞典に載る楠正行と上北山村の関わり ＝

● 現地学習下見で上北山村へ ●

12月14日(木)、扇谷、国府は春に予定している現地学習の下見のため、吉野郡上北山村を訪れた。

上北山村の情報は、東京支部長の広木さんから届けられたが、何と、上北山村には、①楠正行を祭神とする四位殿神社があること、②お宮様という祠での祭りには恩地左近の幟ばたが立つということ、③十郎尾根山には恩智十郎の伝承が残る、という大変ショッキングな内容であった。

11月にも現地学習をと計画をしたが、往復6時間を超える遠方であり、加えて台風による土砂崩れで国道が使えないということから、春に延期を決断した。

今回の下見は、四條畷から上北山村の行程を確認することと、何よりも現地から様々な情報を送っていただき、現地案内をして頂く中岡さん(元教育長・郷土史家)にお会いすることが第一の目的であった。

白川、八幡神社とお宮様

この日午前7時45分に四條畷市の田原支所を出発。阪奈道路、国道24号、多武峰を抜け、国道169号で上北山村の道の駅に到着したのが10時45分。

お迎え頂いた中岡さんと中垣内教育長に合流し、まず向かったのは白川の里で、八幡神社とお宮様。当日お伺いしたお話と、中岡さんに頂いた「上北山村の旧跡を訪ねて」N08, 9, 10, 12の資料を基にレポートする。

上北山村の旧跡を訪ねて・・・平成9年1月、村の教育長に就任した中岡さんに、当時の村助役から「村民が親しく読めるように、

上北山村の史跡について、優しく書いてほしい」との依頼を受け、毎月発行の上北山村報に平成10年から掲載されたもの。村の古老からの聞き取りや古書等の調査を基に『です。ます。』文体で書かれ、その中の4回分・4ページが楠正行に関わる内容。



八幡神社は、文治2年(1186)、源義経が吉野から大台ヶ原を通過して伊勢へ越す時、家来の小泉に守り本尊八幡宮を与えて北山に分祀したとの記録が残っている。

またお宮様の祠は、もともとこの下手の**おんじ**と呼ばれた里で祀られていたものを移したもので、「昔、恩地左近太郎が家来を連れ、楠と共に吉野の奥へ行ったきり帰らなかった・・・。」と八尾で伝わることから、神主でもあり、山伏でもあった左近太郎、そしてその子孫がこの地に住み始めたとの伝承が残っている。

お宮様の祠には、河内の恩地神社同様、十一面観音(鐘を背にして掛ける掛仏)が祀られており、大きさやお姿、お顔から南北朝期のものと思われる。(写真上から 八幡宮、お宮様、恩地左近の守の幟ばた)

お祭りには、今、恩智左近の守の**幟ばた**が建てられるとのこと。

のぼりばたの奉納・・・平成4,5年ころ、中岡さんが村の神社を調査した時、お宮様を祀り続けてきた中垣内素一さん(中岡さんの奥様の実父・106歳で没)から「最近では建てなくなったが、昔は**陰地左近守**と書いた旗を建てたものだ」と聞き、「ぜひ、奉納しましょう」と、**恩地左近守**とし、旗を一對にして建てるようになった。戦後、電源開発や村の水没等の影響で、かつての幟ばたは建てられなくなったようである。注: 陰は陰の異体字。呉音でオンと読む。

天誅組の悲哀伝える林泉寺

そして、すぐ近くの林泉寺に。

ここ林泉寺は、天誅組ゆかりのお寺。文久3年(1863)8月13日、中山忠光を総大将に、藤本鉄石、松本圭堂、吉村寅太郎の三総裁ら天誅組が決起、翌14日に五條代官を襲うも、京都で異変勃発。幕府と薩摩藩が起こしたクーデターのため、天誅組は一夜にして逆賊の汚名を受けることに。

十津川を脱出し、鷲家口に向かう途中、迷いながらの逃走劇の中、9月21日、ここ白川林泉寺に入った。負傷者がいる、病で高熱でうなされるもの、極度の疲れに悩まされ、人手がほしいのに里の人たちは山に隠れて協力しなかった、という。



林泉寺の奥の高台に上り、前方に見える恩地十郎の山尾根を遠望した後、天誅組の悲哀の残る林泉寺本堂で、おいしいお茶をいただきながら、中岡さんの天誅組秘話をお聞きした。(写真：林泉寺の入り口で)

木和田の里、墓石に彫られた菊水紋残る

午後訪れたのは、木和田の里。

木和田の里は、南向きの山すそにできた里で、今も10軒ほどの家が立ち並んでいるが、実際に住まいされているのは1軒とのこと。

何よりも驚いたのが、木和田の墓地に残る福田家の菊水紋の彫り込まれた墓石であった。安永7年(1778)建立の墓石で、墓石表面の下の部位に菊水の紋が彫り込まれている。この墓石を見るだけでも、木和田の里が楠氏に関わりのあることが分かる。



いよいよ楠正行を祭神とする四位殿神社に向かうことに。墓地の横から木和田の在所を抜け、山道を登って行くと、山尾根の一角に四位殿神社が建つ。



地元に残る古文書に、『楠木正行我君を一方要害の為、席めた造明らかなり…』と記され、”木和田の里は我が君楠正行公の要害としてもうけた…”と理解されている。

日本史人名辞典・歴史図書社刊の正行の項には、「正成の子父の湊川に戦死するや遺誠を守て愈々忘れず群童と遊戯するも軍事に擬して尊氏を殲すと云足利を滅ぼすと穰せり長じて大義を唱え和田正朝と共に南帝を吉野に護

る乃ち**正四位下に叙し帯刀となる**」とある。

扇谷は、正四位下に叙されていることを知らなかったが、正月、思わぬ発見があった。何と、1967年四條畷町勢要覧に「文化6年、小楠公墓所境内に”正四位下檢非兼河内守”の楠公碑を建設」との件を見つけた。このことについては改めて報告の予定。

かつて南朝勢がこの地に落ちて来、正行公が正四位下に叙されていたことから四位殿といったものらしい。神社庁にも報告されたことから、広木さんも知ることになった。(左下、写真上から、墓石の下部に菊水紋・四位殿神社に参る)

四位殿神社参拝後、ただ一軒住まいされている福田さん宅を訪問。福田さんは、四位殿神社、墓地等、木和田の里を今も営々と守り続けておられるとのことだった。

上北山村と楠正行の関わり・・・中岡さんは、日本史人名辞典に載る「正平二年正行兵を紀伊に発し河内に還て…」の件を重視したいと力説される。北山川沿いに北山郷(四郷)は河内の南朝勢力との関係が深く、この件は、正平二年正行の快進撃の戦いに上北山村から多くの兵が参陣したと思われ、今も、その名残が村の各所に残っている、と。

北山宮による皇位要求運動の地、龍泉寺

そして、最後の訪問地、小椽の龍泉寺に伺った。

南北朝合一後、南朝勢は嘉吉3年(1443)、京都御所に押し入り神璽を奪い取る(禁闕の変)。そして土地の伝承として、北山宮自天皇が北山にひそみ、この神璽を奉じて伯母峰峠をへだてた川上村に至り、皇位要求の運動を起こしたとあり、龍泉寺は北山宮の御座所跡に建つ。また近くに、北山宮を祀る北山神社もある。



龍泉寺でも、お茶のおもてなしを受け、本堂で中岡さんから自天皇の哀史を伺った。

この日予定頂いた場所をすべて回り、使われなくなった学校の校舎一角に入る教育委員会を訪れた。

中岡さん、中垣内教育長と楠氏談義に花を咲かせたが、お互い、地域に残る歴史を繙きながら、地域の活性化につなげましょうと意気投合。また、中岡さんからは、正行が正四位に叙されていたことを示す根拠史料等をお見せ頂き、多くの資料をいただいた。

最後に、村役場に伺い、山室村長を表敬訪問。

山室村長は、歴史に強く、郷土の歴史を熱く語られ、ここでも大いに歴史談義、楠氏談義が続いた。結果、帰阪の途に就いたのは午後5時前になり、上北山村を出るころにはすでに空が暗くなりかけていた。

上北山村の皆さん。お世話になり、ありがとうございました。

(写真：龍泉寺に掛る自天皇の読み書きに親しむお姿の額)

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)